

## 第8回関西生殖医学集談会

0-8

大阪, 2020. 02. 29

ガラス化凍結融解回復培養後の胞胚腔収縮は妊娠の指標となるか

柴田美智子<sup>1)</sup> 中野達也<sup>1)</sup> 佐藤学<sup>1)</sup> 中岡義晴<sup>1)</sup> 森本義晴<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>IVF なんばクリニック、<sup>2)</sup>HORAC グランフロント大阪クリニック

### 【目的】

当院では凍結胚盤胞を融解し約 2 時間後に胞胚腔の回復確認を行っている。その際に拡張の有無に関わらず、細胞の生存が確認できれば胚移植を実施しているが、予後を詳細に調べたデータは少ない。そこで融解 2 時間後（回復観察時）の状態、さらに 5 時間後（移植時）の状態をそれぞれ比較し妊娠率、出産率、流産率の検討を行なった。

### 【方法】

2017 年 1 月から 2018 年 6 月に単一融解胚移植を施行し凍結直前に拡張している 933 周期、Gardner 分類 3~5 の胚盤胞を対象とし、回復観察時と移植時の胞胚腔の収縮の程度を画像上で確認した。回復観察時に胞胚腔が 90%以上拡張している胚盤胞 (E 群)、それ以外の胚盤胞 (S 群) に分けた。さらに S 群、E 群において移植時に収縮している胚盤胞 (S-S 群、E-S 群)、拡張している胚盤胞 (S-E 群、E-E 群) に分け、臨床妊娠率、出産率、流産率の比較を行なった。

### 【結果】

患者年齢は S 群 : 36.8 歳、E 群 : 36.5 歳と差はなかった。妊娠率は S 群 (40.6%) に比べ E 群 (52.1%) で高かった ( $p < 0.01$ ) が出産率、流産率に差はなかった。S-S 群は E-E 群、S-E 群より有意に妊娠率が低く ( $p < 0.01$ )、E-E 群、S-E 群、E-S 群より有意に流産率が高く出産率が低かった ( $p < 0.05$ )。E-E 群と E-S 群の間に差はなかった。

### 【考察】

胞胚腔は回復観察時に拡張している事が望ましい。回復観察時に拡張していれば移植時の収縮による予後への影響は少ないが、融解後から移植するまで収縮したままの胚盤胞は妊娠率低下だけでなく妊娠継続も難しくなる。回復観察時に強収縮を起こしており、移植までに回復する見込みが少ない胚盤胞は追加融解を検討してもいいかもしれない。